

定理 9.1 : $\mathbb{R}^n$ の 2 つの部分空間 S と T が独立であるとき, つまり $S \cap T = \{\mathbf{0}\}$ であるとき,

(a) $\forall z \in S \oplus T$ は $z = x + y$, $x \in S$, $y \in T$ として一意的に表現できる.

(b) $\dim(S \oplus T) = \dim(S) + \dim(T)$.

[問題 09-02] S と T を $\mathbb{R}^n$ の 2 つの独立な部分空間とする (つまり $S \cap T = \{\mathbf{0}\}$). このとき, 以下の (a) と (b) を説明せよ.

(a) $\forall z \in S \oplus T$ は $z = x + y$, $x \in S$, $y \in T$ として一意的に表現できる.

(b) $\dim(S \oplus T) = \dim(S) + \dim(T)$.

また S と T が独立でない場合は (a) と (b) が成立しない例を示せ.

定理 9.2 (次元の公式) : S, T を $\mathbb{R}^n$ の部分空間とすると以下が成り立つ.

$$\dim(S + T) = \dim(S) + \dim(T) - \dim(S \cap T).$$

定理 9.3 : S を $\mathbb{R}^n$ の p 次元部分空間, T を $\mathbb{R}^n$ の q 次元部分空間, $T \subseteq S$ とする. このとき, 条件

$$S = T \oplus U$$

を満たす $p - q$ 次元部分空間 U が存在する (直和分解, 直交してなくてもよい).

[問題 09-03] S を $\mathbb{R}^n$ の p 次元部分空間, T を $\mathbb{R}^n$ の q 次元部分空間, $T \subseteq S$ とする. このとき, 条件

$$S = T \oplus U$$

を満たす $p - q$ 次元部分空間 U が存在する.

(ヒント : S と U は直交してなくてもよい.)

定理 9.4 : $S \subseteq \mathbb{R}^n$ を p 次元部分空間, $S^\perp$ をその直交補空間とすると

$$\mathbb{R}^n = S \oplus S^\perp. \text{ (直交分解)}$$

証明 : S の正規直交基底を $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_p$ とする. S は $\mathbb{R}^n$ の部分空間であるので, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_p$ は $\mathbb{R}^n$ の基底でもあり, さらに $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_p, \mathbf{a}_{p+1}, \dots, \mathbf{a}_n$ が $\mathbb{R}^n$ の基底となるように $\mathbf{a}_{p+1}, \mathbf{a}_{p+2}, \dots, \mathbf{a}_n$ をとることができる. $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_p, \mathbf{a}_{p+1}, \dots, \mathbf{a}_n$ にシュミットの正規直交化法を施すと, $\mathbb{R}^n$ の正規直交基底 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_p, \mathbf{a}'_{p+1}, \dots, \mathbf{a}'_n$ が得られる. よって $S = \text{span}(\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_p\})$, $S^\perp \supseteq \text{span}(\{\mathbf{a}'_{p+1}, \mathbf{a}'_{p+2}, \dots, \mathbf{a}'_n\})$ である. しかし, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_p, \mathbf{a}'_{p+1}, \dots, \mathbf{a}'_n$ が $\mathbb{R}^n$ の基底であるので, もし $S^\perp$ が真に $\text{span}(\{\mathbf{a}'_{p+1}, \mathbf{a}'_{p+2}, \dots, \mathbf{a}'_n\})$ を含むとしたら $S^\perp \cap S = \{\mathbf{0}\}$ でなくなるので, 結局 $S^\perp = \text{span}(\{\mathbf{a}'_{p+1}, \mathbf{a}'_{p+2}, \dots, \mathbf{a}'_n\})$ となる. $\square$

系 9.5 : S を $\mathbb{R}^n$ の部分空間であるとしたとき, つまり,

$$\dim(S) + \dim(S^\perp) = n.$$

[問題 09-04] $\mathbf{A} \in \mathbb{R}^{m \times n}$ の核は $\mathbf{A}$ の行空間の直交補空間になっていることを示せ.

系 9.6 : $A \in \mathbb{R}^{m \times n}$ とすると, $\text{rank}(A) + \dim(\text{核}) = n$.

[問題 09-05] $A \in \mathbb{R}^{m \times n}$ とし, 問題 09-04 と同様に A^T の核は A の列空間の直交補空間になっていることを示せ.

$\mathbb{R}^n$ の部分空間 S の直交分解を実現するには, S の基底を $a_1, a_2, \dots, a_p$ としたとき, $A = (a_1 \ a_2 \ \dots \ a_p)$ とまずおく. すると

$$\begin{aligned} S &= \{Ay \in \mathbb{R}^n \mid y \in \mathbb{R}^p\} \quad (A \text{ の列空間}) \\ S^\perp &= \{z \in \mathbb{R}^n \mid A^T z = 0\} \quad (A^T \text{ の核}) \end{aligned}$$

と定義しておく.

$u \in \mathbb{R}^n$ を

$$u = x + w, \quad x \in S, \quad w \in S^\perp$$

と表現するには, u の S 上の直交射影を x ととり, $w = u - x$ とすればよい. すなわち,

$$\begin{aligned} x &= A(A^T A)^{-1} A^T u, \\ w &= u - x = \left(I - A(A^T A)^{-1} A^T\right) u \end{aligned}$$

である. $A(A^T A)^{-1} A^T$ は S への直交射影行列, $I - A(A^T A)^{-1} A^T$ は $S^\perp$ への直交射影行列となる.

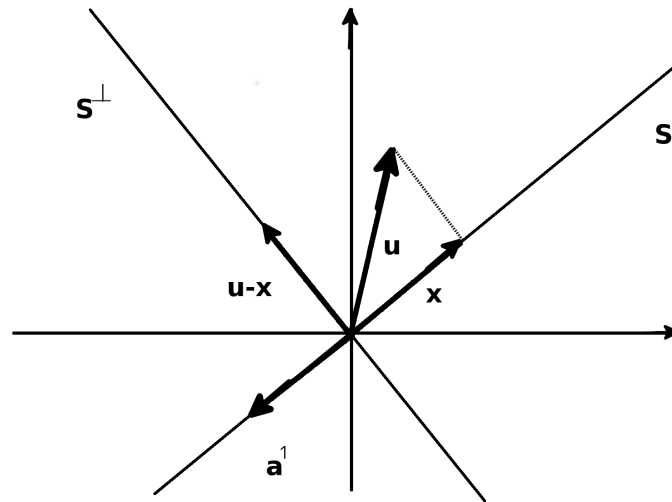


図 20: $\mathbb{R}^2$ を $S = \text{span}(a_1)$ と $S^\perp$ に分解した図. $u \in \mathbb{R}^2$, $x \in S$, $u - x \in S^\perp$ である.

[問題 09-06] S を n 次元 Euclid 空間 $\mathbb{R}^n$ の部分空間, $\mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$ とする. $\mathbf{c} \in S$ が任意の $\mathbf{a} \in S$ に対して条件 $\|\mathbf{b} - \mathbf{a}\| \geq \|\mathbf{b} - \mathbf{c}\|$ を満たすとき, $\mathbf{c} \in S$ を $\mathbf{b}$ の S 上への直交射影と呼ぶ.

- (a) $\mathbf{c} \in S$ が $\mathbf{b}$ の S 上への直交射影であるための必要十分条件は, 任意の $\mathbf{a} \in S$ に対して $(\mathbf{b} - \mathbf{c})^T(\mathbf{a} - \mathbf{c}) \leq 0$ が成立することであることを証明せよ.
- (b) $\mathbf{b}$ の S 上への直交射影は高々 1 つであることを証明せよ.
- (c) S の正規直交基底を $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ とする. このとき, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ を用いて $\mathbf{b}$ の S 上への直交射影を表せ.

[問題 09-07]

- (a) n 次元 Euclid 空間 $\mathbb{R}^n$ の部分集合 S が部分空間であることの定義を述べよ.
- (b) S を n 次元 Euclid 空間 $\mathbb{R}^n$ の部分空間であるとする. S の次元および基底の定義を述べよ.
- (c) V と W を n 次元 Euclid 空間 $\mathbb{R}^n$ の部分空間とし,

$$U = \{\mathbf{v} + \mathbf{w} \mid \mathbf{v} \in V, \mathbf{w} \in W\}$$

とする. このとき, U は V と W を含む $\mathbb{R}^n$ の (集合の包含関係の意味で) 最小の部分空間となることを示せ.

- (d) (c) に加え, $V \cap W = \{\mathbf{0}\}$ を仮定する. このとき, $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_k$ を V の基底, $\mathbf{w}_1, \mathbf{w}_2, \dots, \mathbf{w}_m$ を W の基底とすると, $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_k, \mathbf{w}_1, \mathbf{w}_2, \dots, \mathbf{w}_m$ は U の基底となることを示せ.

10 2 次形式と固有値

10.1 1 変数の場合

$f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ を 2 階連続微分可能な関数とする.

$$\begin{aligned} x^* \text{ が } f \text{ の極小点} &\Rightarrow f'(x^*) = 0, \quad f''(x^*) \geq 0, \\ x^* \text{ が } f \text{ の極小点} &\Leftarrow f'(x^*) = 0, \quad f''(x^*) > 0, \end{aligned}$$

ただし, ここで x^* が f の極小点とは, この点に対してある $\varepsilon > 0$ が存在し,

$$f(x^*) \leq f(x) \text{ が任意の } x \in \{x' \in \mathbb{R} \mid |x' - x^*| < \varepsilon\} \text{ に対して成り立つものである.}$$

これらの証明をするためには, f を点 x^* において 2 階まで Taylor 展開をする.

$$f(x) = f(x^*) + f'(x^*)(x - x^*) + \frac{1}{2}f''(x^*)(x - x^*)^2 + o(|x - x^*|^2)$$

ただし, $o(0) = 0, \lim_{r \rightarrow 0} \frac{o(r)}{r} = 0$ である.

この議論を 2 変数以上の場合において考える. つまり $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ を 2 階連続微分可能な関数とする.

$\mathbf{f}'(\mathbf{x}^*)$ は n 次元のベクトル
 $\mathbf{f}''(\mathbf{x}^*)$ は $n \times n$ 対称行列

となり, $\frac{1}{2}\mathbf{f}''(\mathbf{x}^*)(\mathbf{x}-\mathbf{x}^*)^2$ に相当する部分は $\mathbf{x}$ に対する 2 次形式となる. さらに, $\mathbf{f}''(\mathbf{x}^*) > 0$ ($\mathbf{f}''(\mathbf{x}^*) \geq 0$) という条件は

$\mathbf{f}''(\mathbf{x}^*)$ は正定値 (半正定値) 行列
 $\Updownarrow$
 $\mathbf{f}''(\mathbf{x}^*)$ の全ての固有値は正 (非負)

となる.

10.2 2 次形式と最小 (最大) 化問題

[問題 10-01] $\mathbf{A} = (a_{ij})$ を 2×2 定数行列とする. 関数 $g: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$g(\mathbf{x}) = \mathbf{x}^T \mathbf{A} \mathbf{x} \quad \text{for} \quad \mathbf{x} = (x_1, x_2)^T \in \mathbb{R}^2$$

と定義する. このとき,

(a) $g(\mathbf{x})$ を x_1, x_2 で表せ.

(b) 任意の $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$ に対して,

$$g(\mathbf{x}) = \mathbf{x}^T \left(\frac{\mathbf{A}}{2} + \frac{\mathbf{A}^T}{2} \right) \mathbf{x}$$

が成立することを示せ. 行列 $\mathbf{Q} = \left(\frac{\mathbf{A}}{2} + \frac{\mathbf{A}^T}{2} \right)$ は対称行列になる.

ここでは, $\mathbf{Q} = (q_{ij})$ を $n \times n$ 定数行列, $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ に対して, 2 次形式

$$g(\mathbf{x}) = \mathbf{x}^T \mathbf{Q} \mathbf{x} = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n q_{ij} x_i x_j$$

を扱う. 2 次形式を考えるとときには, 定数行列 $\mathbf{Q}$ が対称行列である. すなわち, $\mathbf{Q}^T = \mathbf{Q}$ であることを仮定しても一般性を失わない ([問題 10-01] を参照).

例:

n 次元空間 $\mathbb{R}^n$ で関数の最小化を考える. $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ を 2 階連続微分可能な関数とする. すなわち,

$$\frac{\partial^2 f(\mathbf{x})}{\partial x_i \partial x_j} \quad (5)$$

が存在して, (5) は変数 $\mathbf{x}$ に関して連続 (関数) であるとする. 点 (ベクトル) $\mathbf{x}^*$ で Taylor 展開をすると

$$f(\mathbf{x}) = f(\mathbf{x}^*) + \nabla f(\mathbf{x}^*)^T (\mathbf{x} - \mathbf{x}^*) + \frac{1}{2} (\mathbf{x} - \mathbf{x}^*)^T \mathbf{H} f(\mathbf{x}^*) (\mathbf{x} - \mathbf{x}^*) + o(\|\mathbf{x} - \mathbf{x}^*\|^2) \quad (6)$$

として表現できる. ただし,

$$\nabla f(\mathbf{x}^*) = \left(\begin{array}{c} \frac{\partial f(\mathbf{x})}{\partial x_1} \\ \frac{\partial f(\mathbf{x})}{\partial x_2} \\ \vdots \\ \frac{\partial f(\mathbf{x})}{\partial x_n} \end{array} \right) \bigg|_{\mathbf{x}=\mathbf{x}^*}, \quad \mathbf{H} f(\mathbf{x}^*) = \left(\frac{\partial f(\mathbf{x})}{\partial x_i \partial x_j} \right) \bigg|_{\mathbf{x}=\mathbf{x}^*}.$$